二〇二二年度前期東洋学講座講演要旨

（「チベット研究の現在と未来
——デジタル技術による文化の保存と継承——」）

第五八三回　五月二〇日（金）

チベットの歴史と文化に向き合う
——チベット研究者の役割——

東洋文庫研究員
筑波大学教授　吉水千鶴子

「チベット」（Tibet, チベット語ではボェという）という名称が意味するところは、今日では複雑である。地理的には、チベット高原を中心とする中華人民共和国の中のチベット民族居住地域を指し、歴史的には、六世紀末からそこに存続してきたチベット民族の「国」を指す。この「国」は、六世紀末から九世紀中葉まで、異民族をも支配した大帝国で、唐からは「吐蕃」と呼ばれた統一国家であったが、その後は、各地域の支配者の集合体として継続し、一六四二年以降、ダライラマを中心としてモンゴル民族も加わって維持されてきた共同体としての「国」である。この「国」は、一九四九年中国共産党による中華人民共和国の樹立と一九五九年のダライラマ一四世の亡命によって、独立を失ったが、亡命後、インドに立てた亡命政権、そして亡命チベット人のコミュニティも広い意味での今日の「チベット」であろう。また、チベット仏教文化圏は広く、内外のモンゴル、ネパール、ブータン、インドのラダック地方などにまで及んでいる。

歴史的なチベットという「国」は失われ、チベットの人々の社会や生活も様変わりした。チベットの文化や宗教も、人民解放軍のチベット侵攻とその後の文化大革命によって、壊滅的な打撃を受けた。Instagramに、historytibetanというアカウントがあり、一九五九年以前のチベットの写真を掲載している。また、イギリスの公共放送BBCは、一九〇三—四年にかつてのインド領からチベットへ入ったイギリス軍や、その後チベットに滞在したイギリス人が撮影した当時のフィルムを編集し、“The Lost World of Tibet”（2006）として公開している。群衆で賑わうポタラ宮の前の広場、寺院に集まる何千人もの僧侶、ダライラマが乗った輿の華やかな行列、正月の祭りでダンスや競技に興じる人々、すべてのものが失われた。それは社会や生活が変わったというだけではなく、自由と独立が失われたという喪失の悲劇なのである。

私たち、チベット研究者は、チベットの言語や伝統文化が完全に失われないよう、チベットの人々と共に、その保存と継承を考えなくてはならない。チベット研究者は、多

様である。一九世紀、ヨーロッパにインドやアジアの伝統文化に関する知識がもたらされ、その中で「チベット学」（Tibetology）という学問が始まった。これは、異なるディシプリンをもつ学問を包括し、チベットに関することなら何でもあり、という学問である。チベット学者は、それぞれ歴史学者、言語学者、宗教学者、社会学者、人類学者などの別の顔をもつ。資料研究もあればフィールドワークもある。日本では、明治時代に仏教界がチベットへの関心を高め、河口慧海、寺本婉雅、能海寛などがチベットを訪れた。河口慧海（一八六六―一九四五）は、ラサのセラ寺で学び、帰国後、晩年は東洋文庫で、チベット語辞典の編纂や大蔵経の研究を行った。

チベット語辞典は、残念ながら完成には至らなかったが、東洋文庫では、一九六〇年にチベット研究室が発足し、翌年「チベット人との共同によるチベット語・チベット史・ラマ教の総合的研究」プロジェクト（ロックフェラー財団支援）を開始、チベット人学者三名をインドより招聘し、日本チベット学会を開催している。以降、現在まで、チベットの言語・歴史・宗教・文学・社会の広い領域の研究を続け、多くの研究成果を出版してきた。近年では、デジタル技術が進み、文献の保存、調査記録の保存が容易になった。デジタル化の大きなメリットは、オープンアクセスによって誰もがそれを共有できるということであろう。東洋文庫リポジトリのTibetan Digital Libraryでは、河口慧海が請来したチベット語文献の電子データを公開している。このようなデジタル・ライブラリは世界各地で作られており、敦煌文書、チベット大蔵経、チベット人の著作の数々も、今や、図書館に足を運ばなくとも、自宅でデータにアクセスすることで研究ができるようになった。文化の保存と継承、そして研究の環境が、画期的に整えられたと言えよう。

日本のチベット研究者の役割を考えると、その歴史的文化的近さから、私たちがチベットと共有してきたものに目を向けるべきであろう。広くアジアの中の日本とチベットを見るのである。まず、日本もチベットも歴代の中国を挟んで、同じアジアの歴史を生きてきた。仏教の伝来は、日本では六世紀半ば、チベットでは七世紀半ばであるが、当時のインターナショナルな宗教を輸入したことは共通である。一三世紀にはどちらもモンゴル（元）の襲来を受けた。そして、黒船来航に象徴されるように、欧米列強のアジア進出に翻弄されたのは、イギリスとロシア、清朝の覇権争いに巻き込まれたチベットも同様である。その後の運命は、大きく隔たってしまったが、仏教という共通の精神文化をもつ私たちは、チベットの伝統文化をもっともよく理解できる立ち位置にいるのではないだろうか。

そして、現在、心に置きたいことは、チベット文化は決して消えてしまった過去のものではなく、アーカイブの中にあるだけのものではない、今も生き続けているものだということである。社会は大きく変わったが、チベットの人々は生活し、信仰し、ダライラマもおり、村々には身近に転生ラマもいる。高僧は中国語も駆使して説法し、漢人の信徒も増えている。文学や音楽、映画などの新しい文化も生まれている。「人の力」こそが、文化を継承する一番大きな力である。私たち研究者も、その一端を担う者なのである。

第五八四回　六月二四日（金）

チベット仏教経典資料
――チベット大蔵経の保存と活用――

東洋文庫研究員
鶴見大学准教授　宮崎　展昌

河口慧海師がチベットより請来したチベット語大蔵経および関連資料として、東洋文庫には次のような資料が所蔵されている。

・写本カンギュル
・ナルタン版カンギュル・テンギュル
・デルゲ版カンギュル
・チョネー版カンギュル
・蔵外文献

「カンギュル」は「仏説部」とも呼ばれ、仏教の開祖である釈尊が説いたとされる経典と律からなる文献群であり、「テンギュル」は「論疏部」とも呼ばれ、釈尊より後の仏教者らが著述した論書や注釈書などからなる文献群である。日本では、両者を合わせて「チベット大蔵経」と呼び、チベットに伝わる仏教の全書的叢書として知られる。さらに、チベットの仏教者らによって著されたチベット語著作は、一般に「蔵外文献」に分類され、チベットにおける仏教の展開を知るうえで貴重な文献群を形成している。

上記のうち、写本カンギュルについては、一九世紀に書写されたものながら、ダライ・ラマ一三世の勅許を得て、河口慧海師がギャンツェにて書写されたものを持ち帰ったものであり、「東京写本カンギュル」として世界的にも知られてきた。東洋文庫では、二〇二一年度より、同写本カンギュルに関して、「宝積部」を皮切りに、インターネットアーカイブにて公開する事業を開始した（https://app.toyobunko-lab.jp/s/manuscript_kanjur/page/home）。